(表紙)

家譜

慶永公

二百十巻追加

到同十年十二月

従明治八年一月

X

一六

一月一日御方々様益御機嫌能被遊御超歳奉恐悦候

明治八乙亥年

正四位様・御前様 信次郎様於御座之間御椅子二被為掛、

御家従

一月二日正四位様午後二時真崎御邸江被為入、

正

一位様・御簾中

々真崎御邸江罷出、

御祝詞奉申上候

正二位樣午前八時御出門御参賀、

午前十一

時御家扶初御家従之面

杉田伊之助

様江御祝詞被仰上候

之面々礼服着用、 歳旦之御祝儀申上候

伊藤 輔

香西 成

一月三日元始祭ニ付御参拝被遊候

井上 徹

中根 新

白井久人

蟹江太平

一月九日午前九時御出門増上寺江御参詣、

左之通御備被遊、

御帰

月四日新年宴会二付午前八時御出門御参朝、

路天徳寺江御参詣被遊候

沢木禄平

山沢 井上三男吉 簡

山本 武

松江

佐野

高橋太一

大森豊二

黒本尊

同百疋

各御霊屋

同

東照宮

金百疋

月十一日御前様午後

時御出門真崎御邸江被為入、

御弐所様江

御祝詞被仰上候

天谷五郎七

御料理御戴相成候

月十八日本日御哥会始二付左之通御詠進相成候

同 詠都鄙迎春歌

御名

玉垣のうちつ御国も八十島もゆたけき年をむかへつるかな

月廿 一日式部寮ゟ左之通御廻達

今廿 一日午前五時四十五分権典侍柳原愛子分娩、 皇女御降誕被

為在候二付、 今日ゟ三日之間通常礼服着用、 宮内省江参賀可有

之候也

明治八年一月廿 Н

式部頭代理

式部助五辻安仲

松平正 一位殿

右御達二付御参賀被為在候処、 於宮中御祝酒肴御頂戴被遊候

一月廿七日皇女降誕二付今廿七日神殿参拝、 且餔宴賜候条御達二

付 午前八時御出門御参内被遊候

但 通常御礼服御着用之事

二月五日今午前七時三十五分御中﨟ふち分娩、

二月十一日本日御誕生様御七夜御祝儀ニ付、

御誕生様御使を以御

名被進之

御目録

此訓ヤスヒロ

出典

王勃拝南郊頌序天下黎人知四海之安楽寰

爾雅康安也

中殊域奉三霊之康泰

詩小雅泰寛也

一字併テ二十画震大命風上

右御使御家扶香西成相勤上下着

本日御七夜御祝儀二付、 御招被進、 随而御家従 一同於御前御酒肴被下之、 真崎御邸江正四位様 ·御前様 其節正二位様左 信次郎様

余神祐ヲ得テ一男子ヲ挙ク、其第七日命名ノ嘉儀ヲ行フヲ以テ、

之御祝辞御告示被為在

家団欒衆庶ヲ会同シ大ニ祝宴ヲ開ク、 余此欣幸ノ情ヲ酌、

レヨク充分歓ヲ罄サンコトヲ望ム

二千五百三十五年即明治八年第二月十一日

御男子様御誕生被

謹テ奉答

輔等斯ノ吉辰ニ方リ斯ノ祝宴ニ陪伴ス、 爰二公子生誕ノ第七日、 命名ノ典儀ヲ行ハセラレ慶宴ヲ開ク、 何ノ幸福カ之ニ過ン

ヤ、 尚庶希クハ公ノ眉寿無彊ト同ク公子ノ芳齢ヲ万歳、 且公

孫 ノ益以テ繁盛衍昌ナランコトヲ恭ク祝シ奉ル

二月十二日左之通御届書御指出ニ相成候

本月五日午前第七時三十分、 隠居正二位慶永妾腹男子康泰致出

生候、 此段御届申候也

明治八年二月十二日

壱丁目弐番地 第一大区十四小区蛎売町 (殻)

正四位松平茂昭

同区戸長御中 壱通 東京府知事大久保一翁殿

二月十四日左之通被仰付之

白井久人

是迄之通相勤候様被仰付候事

月給拾四円被下候事

二月十七日千本久信着京す、 右者御依頼之筋有之、先般御両名御

直書ヲ以被仰越候ニ依而也

二月十八日左之通御直書ヲ以、千本久信江御依頼相成候

東京府江拝借願済迄、 乍苦労家令之心得ヲ以、 当家用向万事相

弁候様致依頼候事

二月十八日

両公御名

千本久信殿

当家制向其他万事委任申候間、 宜令依頼候事

同人

月給金五拾円被下候事

二月廿六日左之通被仰付之

御家扶

真崎御邸専務 伊藤

輔

成

御表様専務 徹

今般家制改革殊ニ辞表も指出候ニ付、 不得止家扶相断候事

右三人

不堪感謝候、 今般家制改革家扶相断候ニ付而ハ、多年之勤仕不容易勉励 依之其報答之証トシテ、慰労金五百円ツヽ相送

リ候事

右之通被仰出候処、 其後訳合有之御取消二相成候

準家扶申付候事

中根

新

三月三日左之通宮内卿ゟ被仰出

来ル五日午前第七時御出門横須賀造船所江行幸、 船卸式天覧ニ

今般御改革二付御家従御断被成候事

但月給半年分被下候事

付拝見致度向者、 各自同所江出頭不苦旨被仰出候間、 此段申入

候也

八年三月三日

宮内卿徳大寺実則

麝香間御同列殿

追而横浜ら横須賀迄御同船被仰付候ニ付、 出頭之輩者至急可申

出候也

三月四 日前記之儀ニ付、 左之通御届相成候是出相成候

明五日横須賀造船処江行幸、 船卸式天覧二付拝見致度向者、 各

自同所江出頭不苦旨被仰出、 奉拝承候、 拝見仕度ニ付出頭仕候

此段上申候也

八年三月四日

宗城

慶永

伊達老公御同車二而新橋停車場迄被

為入、 夫
ら
汽
車
二
而
横
浜
江
被
為
入
候
、 主上御待受之上御同船二而

三月五日本日第六時御出門、

横須賀江御着、 右船卸御陪観被遊候

但横須賀江御 泊 翌六日午後五時御帰莊相成候

三月十七日左之通被仰出之

蟹江太平

今日御断被成候事

三月十九日左之通被仰付之

今般両御邸御改革之折柄諸事二付注意、 別而会計之儀所考之旨

佐野

久

も候ハ

\無遠慮可及上申、

其他御用之儀万事白井久人江可申談

三月廿一 日

御人少ニ付一時為御雇出頭候様御家扶ゟ口達ニ寄、

御用弁相勤候事

但日給金三拾七銭五厘ツヽ被下候

四月六日左之通荻野秋雄御依頼二相成候

正二位様御附御近習勤御頼被成候事 明治八年四月六日

荻野秋雄殿

中根 新

西村寿雄

本年三月廿日ヨリ当分之内、 御相対ヲ以御家従ニ御雇相成候処、

-185 -

本日ゟ出

勤

西村久雄

四月廿七日 几 四月十四 東京府江拝借願済迄、 月十五日 但御雇日数二十日之日数、 今般御家制御改革二付、 依頼相成、 右当時岐阜県江出仕之処、 右同断二付御断被成候事 候様致依頼候事 四月十六日 八年四月 H 該県辞職之上本日着京相成候 乍苦労準家扶之心得を以、当家用向相弁 御家従御断被成候事 今般御家制御改革ニ付御直書ヲ以御 月給金七円五拾銭御渡被成候事 **両公御名** 山沢 荻野秋雄 武田正規 武田正規 きよ 簡 五月廿六日 五月廿三日 右熊本表江被為入候二付、 供御依頼被成候事 今般真崎奥方様白川県熊本 江御出 ニ付、 遊候旨被仰出候事 X X

御簾中様御儀今般顕光院様江為御対顔、 近々熊本表江御発途被

奥女中室田

らく

左之通御供被仰付候

表佐野

家丁多助

大森豊治

右御旅行中御家従并御

細川様御家扶

島田九郎治

御医師御雇高知県 **厂梶俊助**

山沢 簡

真崎奥方様白川県熊本江御家従御依頼被成候事

康泰様御儀今日御簾中様御養二被仰出候

五月廿二日左之通被仰出之

右ニ付

御簾中様ゟ

康泰様江

御簾中様江

同

御さかな壱折

右被進之趣を以御目録為御取替、 御使御家扶被仰付候

康泰様ゟ

御前様 Ê

正四位様

康泰様江 交御肴壱折

康泰様ゟ

(正四位様 鯛壱枚

御前様

右為御取替相成候

下熊本表江御出立被遊候、 正二位様御同車新橋停車場迄御見送被

五月廿八日御簾中様御儀本日午前第七時真崎御邸御発車、

白川県

様・津軽従四位様神奈川駅迄御送被遊、 藤沢御泊迄中根新被遣

御前様・信次郎様・細川正四位様・

細川従四位

遊候、

正四位様・

明朝之御発駕見上ケ罷帰、 御機嫌奉申上候

但シ東海道通り神戸ゟ御乗船、 下之関江御着船、 夫ゟ小倉へ御

陸通り熊本表江御着被遊候

正二位様より左之御哥被進相成候

君のかへり給ふを

としゆきてとくかへりませ何となくいまたわかれの袖の むら雨

朝な夕な我菴崎に待乳山ひとり千秋のこゝちこそすれ

六月五日御簾中様御道中無御滞、 細川様ゟ御直書ヲ以被仰進、 本日熊本県江御着被遊候旨電報 御安慮被遊候

七月六日

右熊本県ゟ昨日着、 顕光院様・ 御簾中様より之御伝言旁、 尚御

機嫌為申上出頭

出来故、 七月十日熊本表ゟ電報、 御簾中様御発途御日延相成候旨、 顕光院様御容躰去る九日朝より余程御不 委細御使者二而被仰越

候旨被仰遣候

七月十八日熊本表より御家従山田喜一と申者到着参上、 両君様御同坐御聴取被遊候 御容躰委細申上、 且御簾中様御発駕御日延御願被遊候条言上、 顕光院様

細川正四位様御家従板垣信康

七月十九日御簾中様御儀、 本日熊本表御発駕被遊候旨電報相達候

七月廿日熊本表ゟ之電報細川様ゟ為御知

幾許之御不出来二而極々御気遣二寄、 顕光院様近日御快二付、 去ル十九日御簾中様御発途被遊、 細川御両所様ニも為御看 其後

病急々御下県御願相成り候ニ付、 御簾中様にも御引返し願置候

との御主意ニ候

同日六時到着熊本より之電報細川様ゟ為御知

顕光院様御儀十九日午後五時過ゟ俄之御不出来、 廿日午前 一時

様ニハ御途中より御引返シ被遊候御儀、 御縡切恐入候二付、 細川御両所様速二御下県奉願候条、 佐野久ゟ電報ヲ以申上 御

簾中

候

顕光院様御様子御替り、

依

而御途中ら御引返被遊候ニ付

御

 \mathbb{H} 延御願御差出可相成様との御事也

同日康泰様御儀今午前九時より俄二御発病、 其内岩佐純出頭御薬調進、 脳部御冷溻法差上、 +時比御全身浴差上、 稍々御緩解之御様子二被為入候 種 御医師田代弘出 々御手当申上 一候処 [頭御

七月廿三日

宮内省御雇日耳曼国トクト ホフマン

右康泰様御容体ニ付、 岩佐純を以御依頼相成午後六時過参上、

> 御容躰純・弘承り候 但通弁人差添参邸

康泰様御容体之御儀 熊本県ニ而御簾中様江電報を以申上ニ

相成候

七月廿六日

金拾五円

金五円

通辞樫村清徳 ホフマン氏江

右診察御依頼ニ付御挨拶として御贈与相成候

同日左之通被仰付之

御家従御依頼被成候事

但馭者并御家丁取締専務之事

八月二日康泰様今暁より亦復御拘攣御発動、 遊候二付、 正四位様 ·御前様御来邸、 今晚御逗留被遊候 追々御衰弱御 が加り被

八月三日康泰様追々御危篤御心配被為入候条、 熊本表御簾中様

江

電報ヲ以被仰進候

安西五郎吉

去被遊、絶言語奉恐入候、右ニ付熊本表御簾中様江電報ヲ以申上同日康泰様御儀、今午前第一時五十五分遂ニ御養生不被為叶御卒

相成候、諸方為御知本日夫々御仕出二相成候

天徳寺不断院

右罷出御回向仕候

康泰様御法号、奉称涼月院殿候条被仰出候

一八月五日熊本表御簾中様御許ら御答電信

康泰様御卒去之段、御承知御驚嘆御残念被為在候条、且又明六日

該地御発途被遊候御儀被仰進候

行、先ゟ品川海晏寺江御埋瘞無御滞被為済候寺役僧出頭、御棺前御回向申上、一時御出棺、於同寺御葬儀御執八月八日本日午前第一時涼月院様御遺骸御発棺ニ付、同時前天徳

但御葬送御行列中、御旧臣巡査之面々御警衛として御供仕候

御着被遊、恐悦之御儀ニ奉存候、其前御前様真崎御邸江被為入、八月廿二日御簾中様本日午後二時五分過、御道中無御滞熊本表ゟ

御待受被遊候、正四位様ニハ神奈川御昼休迄為御迎被為入、御着

後御参館御歓被仰上候

十月廿三日本日於今戸大七楼細川御父子様・津軽従四位様・中川

可引用すれたなら、甲斐公司と長くのでは、 は、大田県土族戸梶俊輔同上被為召、午後四時ゟ御来集ニ付、御供致・高知県士族戸梶俊輔同上被為召、午後四時ゟ御来集ニ付、久昭様之為。御招請、細川様御家扶鬼塚通利・同島田泰臣父子御簾

E刻御方々様被為入御饗応有之候

但シ今般御簾中様熊本表ゟ御帰ニ付、右御饗応席御催シ相成候

正二位様午前八時御出車海晏寺へ御参詣、夫ゟ天徳寺江御参詣被十一月十日本日午前於天徳寺、左ノ御霊牌方御法事御執行相成、

遊候

涼月院様 御百ケ日

有光院様 三回御忌

貞照院様 弐拾七回忌

*

十一月十七日

(引移候) (本日真崎御邸御小屋江

佐野 久

慶永儀過日来痔痛ニ而難渋罷在、于今全治ニ不赴、就而ハ館務一十二月廿六日左之通華族会館副長池田慶徳殿江御差出ニ相成候

固辞致度此段懇願候也

多端之際長々引籠居候而

ハ恐懼之至ニ不堪候間、

特撰議員之儀

華族会館長
明治八年十二月六日

松平慶永 御印

明治九丙子年

月一日益御機嫌能御超歳被遊奉恐悦候

但 .御式諸事御近例之通ニ候

一月十六日本日御哥会初二付、 左之通御詠進宮内省御歌懸り江御

指出相成候

同詠新年望山

歌

正 一位松平慶永

あたらしき年のはしめにあふくかな国を鎮めの不二のしはやま

二月四日左之通御辞表稲葉通久殿迄御指出、

員江御指出ニ相成候様御頼旁白井久人罷越候

致度段及懇願候処、 慶永儀長々所労罷在候二付、客冬十二月華族会館特撰議員固辞 精々養生之上勉励可有之旨御附紙之趣謹承

且既ニニケ月余之引籠ニ相成、 本館章程第弐拾二章・第四章掲

今以依然全治二至兼実二不堪恐懼次第

爾来一層加護摂養候処、

載之旨趣ニ拠り、 更二特撰議員及固辞候間、 此旨御領承宜御取

計願入候也

明治九年二月四日

池田慶徳殿副長

松平慶永 御印

> 位様御代理御出頭被遊候処、 左之御書付御渡相成候

二月十二日本日華族会館ゟ第十時御出席相成候様御達ニ付、

正四

特撰幹事兼特撰議員松平慶永

仮特撰議員兼務御断承候事

明治九年二月十二日

華族会館

三月三十一日左之通

依願御暇被遣候事

出精相勤候二付金弐拾円被遣候事

右之通女中頭室田迄御書付御渡、 猶当分御賴相成候事

五月十日左之御廻章相達候

各位愈御安泰奉珎賀候、 然者梅宮御違例二付、 同席日々壱人ツ

、何御機嫌参上之儀申合候間、 思召も無之候得者、 別紙日割之

通御参有之候様希入候、 此段申入候也

但梅宮御殿江向ケ御参候様存候、 時間 ハ前後共御随意ニ而 宜

五月十日午後

道孝九条公

同日左之通麝香間御 統ゟ御願達

今般御東巡被為在候二付而ハ、 私共ニ於テモ積年御優遇之万分 同 日 1嵯峨卿 池田卿ゟ御廻章

ヲ奉存候間 御留守中ハ日々勤番且宿直仕度、 此段御許容被下

度奉願候也

明治九年五月

御同列御十二名

宮内卿徳大寺実則殿

願之趣神妙二被思召候得共、 勤番宿直 ハ不被仰付候条、 両皇

后宮江御機嫌可相伺事

明治九年五月十五日

五月十一日細川護久様ゟ以御使為御知、 御病気之処御養生無御叶、 昨十日午前四時御逝去被遊候条被仰進 於白川県細川行芬様兼而

候、 右者御簾中様御叔父之御続合ニ候処、 御半減之御忌服被為請

同日左之通中山忠能卿ゟ御廻章

御巡幸中勤番願之儀加書之通ニ候、 就而 大宮皇后宮江 時

御機嫌伺、 且静寛宮江も同様別紙之通可相伺哉是亦御相談申入

賢慮御名下江御加筆乍御面倒早々御廻覧、 来ル 廿八日中御

返し可給候也

五月十一日

御同列御連名

通致有之、先御預り申置候、 去ル二月中御贈進申候特別謝金、 右者衆議之上御贈進申候金円ニ而 各位御存慮之旨有之御返納御

会館ニ於テ収納致置金円ニも無御坐と存候間、 右金円ヲ以書籍

購求致シ、書籍局へ寄附候方可然哉ト、 忠能卿初其他諸卿

御諮謀、 同意之方々有之候、 各位御同意之方ハ右様取計可申

御相談方申入候、 無御腹蔵御報知有之度候也

九年五月十二日

池田慶徳

嵯峨実愛

御名・毛利・秋月・ 五条四卿御宛

日ク会館特撰議員御解職 ノ方々へ御族中ヨリ御謝酬金

相成候処、各位御辞退ニ付館議此ニ及フ者カ

右二付各位御承知左之御書取御贈付相成候

文運日ニ隆月ニ盛ナリ、 斯館学課ヲ設ケ勉励進歩ヲ見ル何ノ

幸ソヤ、茲ニ目次ニ記載スル所涓々ト雖トモ書籍局へ寄附シ、

生徒ノ広見ヲ裨補セントス、 冀クハ其請フ所ヲ許諾アランコ

ヲ

年 月 H

御連名

六月二日主上青森筋御発輦二付、 江 御出 頭 御奉送之後御料理御頂戴御帰邸被遊候 午前第五時三十分御出門宮內省

六月七日左之通御行在所江御伺相 成候

聖上益御機嫌能奉恐悦候、陳者御巡幸御旅中奉伺天機度以一紙

言上候、此旨御沙汰奉願候

明治九年六月七日

麝香間御十三名

宮内卿御宛

問之処、 恐入候旨御聞取、 宮江御参上、 御園内御通過青山御所江被為入、皇大后宮御機嫌御伺御退出梅 公麝香間御廉ヲ以、 極御尤之趣ニ被申出候ニ付、 但梅宮御病気御危篤ニ付、 同人申上候ハ、 御危殆二付御容体御伺、 御慨然御退朝被遊候、 再梅宮御危篤二付皇后宮御機嫌御伺、 本日午前五時御内実薨御被為在候条奉 御機嫌御伺之義津田少丞へ御照会至 臨時御機嫌為御伺御参上相成候 尚高橋侍医江御面接御審 ○梅宮本日午前五時御 夫ゟ

危篤之御容躰之趣、

宮内卿代理万里小路博房卿ゟ麝香間御一統

御通知二相成候

日夜半宮内省ゟ別紙之通布告有之

同

三品薫子内親王御儀、今八日午前第五時薨去被遊候、此段申入

候也

明治九年六月八日 宮内大輔万里小路博房

麝香間御同列御連名

御依頼、 六月九日午前九時御出門宮内省へ御参上、 前江御進ミ、 宮江御参上御悔被仰上御名刺御通シ、 何御名刺御指出シ御退出被遊候 献備之儀ヲ中山忠能卿へ御依頼相成御連名ニて尚又柳原光愛卿 所江御参上、皇大后宮御機嫌御伺録江御名刺御差出シ御退出、 機嫌御伺、 親王御尊骸江御拝御願之処、 少丞津田信弘江御名刺御差出シ、 御拝礼畢而御退散、 夫ゟ静寛院江御参上、 御承知ニ而公・池田茂政 嵯峨実愛卿へ 梅宮薨去ニ付皇后宮御 夫
ら御
園通り
青山 御面晤、 御機 榊御 嫌 梅 御 御

一三条公ゟ猶又左之通御達示有之

之地方ハ到達之日より可算事但三日之間哥舞音曲等令停止候、東京府下ハ本日ゟ、其他三品薫子内親王昨八日薨去被遊候条、此旨布告候事

一六月十日中山忠能卿ヨリ左之通御廻達

明治九年六月九日

太政大臣三条実美

々宮江御参集可給候、御不参ニ候ハヽ、右刻限迄ニ御示シ可被故梅宮江榊献上且拝礼御願之方ハ、来ル十三日朝十時迄ニ無遅

章政殿

六月九日

麝香間御同列御連名

薫子内親王薨去二付、 御同列中ら御巡幸先江左之通天機御伺

相成候

三品薫子内親王御違例之処、 遂二昨八日薨去之段恐嘆之至二

候、 被達叡聞候由深恐入候、 奉伺天機度以一紙言上候、

宜御沙汰奉願候也

明治九年六月八日

麝香間御拾三人

宮内卿御宛

六月十三日式部頭坊城俊成殿ゟ左之通

来ル十六日三品内親王薫子尊御葬式ニ付、 為奉送申合

第七時通常礼服着用、 青山梅御殿江参入可有之候也

明治九年六月十三日

式部頭坊城俊成

麝香間詰

一位中山忠能殿御始

従

中 山忠能殿・ 九条道孝殿・ 徳川慶勝殿・ 久我建通殿 広幡忠礼

同日午前第十時揃二而麝香間御

統梅宮江御参上

殿 ·三条西季知殿 大原重徳

殿 池田慶徳殿・ 毛利元徳殿·池田茂政殿· ・御名 浅野長勲殿・ 嵯峨実愛殿 亀井茲監殿 ・池田

> 右御同列ら榊壱本壱筒宛御献上宮内省江御依頼相成御柩前右御同列ら榊壱本壱筒宛御献上中山卿御周旋二而 二而御拝

被為済御退散

本日御集合之節左之通被仰合、 来ル十六日故薫子内親王御葬送

麝香間御惣代正二位広幡忠礼卿其外御同列者、

岡江御先着之事

ニ付供奉、

但午前十時迄ニ無遅々参向之事

翌十七日両皇后御機嫌御伺之事

六月十四日池田章政殿・亀井茲監殿 浅野長勲殿・御名・ 徳川慶勝殿ら、 ·池田茂政殿 柳原光愛殿江柳原愛子殿為御 ·池田慶徳殿

悔左之通被進之

翰拝呈、 梅宮薨去御同前二奉恐入候、 尊卿ニも前後深ク御心

上度聊拝呈仕候、 配御心中奉想像候、 御受納被下候得者此上之儀与奉存候也 就而者此品菲薄之至二候得共、 御見舞由

六月十四日

柳原光愛殿

六月十五日三品内親王薫子尊御拝礼次第如左被仰出御手配

午後第一時大礼服着用梅御殿江参上、 直二於御棺前拝礼、

串畢而退散

但手水·玉串等宮内省官員出張取斗候事

江安置、 六月十六日三品内親王薫子尊御葬送二付、 上 皇族、 進二寄御門前江御整列御奉迎、 凶報を送ル、 次ニ奏任官等前ニ同シク礼拝捧玉串、 島岡江為御先着被為入小礼服御着用十時過二御着岡午前第十一時 皇后宮・一品淑子内親王・静寛院宮御名代女官拝礼捧玉串、 斎主供神饌奏吊辞、 皇大后宮御機嫌御伺御退散 次二勅任官太政大臣を初礼拝捧玉串、 右御場所迄御供奉被遊候、 各御参内伺天機且皇后宮御同様、 刺使侍従西四辻公業殿被捧玉串、 + 第一 時卅分御着棺、 畢而徹神饌奏楽、 時後御葬式御執行、 午前八時過御出車、 次二麝香間詰華族 夫ゟ青山御所江参 御葬地御壙上 皇大后宮 畢而大砲 次ニ 奏楽 御 豊

六月十七日左之通御直書ヲ以被仰出候

体認シ万事ニコレニ関スルノ要件ヲ施設スヘシ為ニ、諺ニ云里子ニ差遣シテ華族ノ旧俗ヲ脱去致度、此旨趣ヲヲナシ身体健康ナランコトヲ望ム、依之其児ヲ遠村ニ疎隔スルラ秋幼児出生候ハヽ、従前養育ノ旧慣ヲ廃シ、平民同等ノ鞠育

明治九年六月十六日

一六月廿日左之通被仰付之

中野哲之助

真崎御邸勤馭者并家丁取締専務之事

但月給拾円被遣候事

六月廿七日左之通被仰出之

正二位松平慶永殿

初御壱人宛被為召、御召上り之御盃『御戴キ、畢而各御立礼御大臣方及麝香間御一統御参内、御前御着床御茶菓御戴キ御給仕御六月廿八日午後一時御出門、皇后宮召ニ寄御参内被遊候、月廿八日午後一時御出門、皇后宮召ニ寄御参内被遊候

御歌

退散被遊

宮内卿

へ御礼被仰上候

国のため行幸なす世の夏にあひて民の草葉もいやしけるらむ

御詠進

この夏は君か行幸に御恵の波やこゆらん末のまつ山

一七月七日

馭者并家丁取締安西五郎吉

依願御家従被免候事

七月十九日来ル廿日還幸、横浜港江御着船ニ付、奉迎トシテ通常

礼服着用、午前第八時卅分迄二横浜停車場江出張可有之候也

追而本文出張ニ付而ハ、横浜大江橋向外務省出張所江扣所設

圃

御消暑之為メ高崎屋嘉右衛門宅一

一階御借受御休息被遊候、

中山卿等御初御申合二

無之趣ニ候、

依之御中食御折御頂戴之後、

置候条、同処江参集可有之、且午後三時為天機伺宮内省へ参

上可有之、此段申入候也

明治九年七月十九日

式部頭代理

右ニ付御書下左之通

明廿日還幸、同列一統為御迎横浜江午前八時三十分迄出張

一通常礼服之事

横浜大江橋向外務省出張所ニ扣所有之候事

同所御迎御見送申上勝手ニ帰京、午後三時為伺天機宮内省

江参上候事

一三条西季知卿同車中山忠能卿邸江参上、夫ゟ忠能卿馬車

季知卿、○○馬車江嵯峨卿同車、各新橋停車場江行向候事

浜港江御出発、三条西季知卿御同車中山卿御邸江被為入、御同伴七月廿日午前第五時三十分御出門、前記御書下之通還幸為御迎横

新橋停車場七時発之汽車江被為召、第八時横浜停車場江御着、大

間奏任官、但シ式部官詰居候事勅任官、上下間麝香間詰、下次之

江橋御渡り外務省出張所ニ於テ御休息被遊候、

外務省出張所ハ門

碇且昨日横須賀江御出迎之東艦らも報告約束有之候処、未夕通報今朝金田湾御着之積之処、未夕御報知無之、昨日大久保内務卿着

馬車ニ而御帰荘被遊候夕御飯召上リ、午後七時卅分汽車ニ而御帰京、新橋停車場より御日御出張之事ニ御取極メ、伊達卿へ条公ら御伝語有之候、右ニ付日御着艦電報も無之ニ付而ハ、三条公御始御帰京、今日ノ如ク明

七月廿一日午前第五時三十分御出門、新橋ゟ七時汽車御乗組ニ而

横浜江被為入都而昨日之通

車二而御帰邸、直二為天機御伺御参朝、御料理御頂戴、第二時御同所停車場前ニ而御奉迎、一旦御扣処江被為入、十時四十五分汽

帰莊被遊候

立奉迎但左ヲ上席トス一停車場向神奈川県官員列立并ニ勅任官・麝香間詰・奏任官列

一鳳輦御経過之節各脱帽立礼、直ニ停車場御休息所江入御

一午前九時前汽車前江整列奉送、聖上御歩行ニ而御乗車、一統

脱帽立礼

御吸物・御肴御頂戴御退散相成候二天機御伺、皇后宮・皇太后宮江も御祝賀、於麝香間御酒・二天機御伺、皇后宮・皇太后宮江も御祝賀、於麝香間御酒・一第十時四十分汽車ニ而御帰京、直ニ御参内、還幸之御祝賀弟一御奉送相済外務省出張所江御帰り、御午餐御戴キニ相成候

同日左之通被仰合御治定相成候

毎月

五日、十五日、廿五日

御参朝従前之通

五日、廿五日

皇太后宮・青山御所御参上

十五日

静寬院宮江御参上

X

七月廿七日秋元興朝殿御養祖父志朝殿、昨廿六日御逝去被成侯段

細川様より為御知有之、右者御簾中様御従弟之御続ニ付、三日御

忌被為請候

同日左之通

華族勤番世話懸リ心得之者相定リ候上ハ、勤番事務上ニ関候儀

一切同懸リ江可相達候条、此段相達候也

明治九年七月十日

宮内大輔万里小路博房

華族副督部長

土州藩戸梶俊輔

右無拠入用之儀有之旨ニ而拝借金願出候処、当節御取揚難被成

同日

二付、御手許ゟ金百円被下置候事入候節、御医師へ御雇相成候事ニ付、御手許ゟ金百円被下置候事但俊輔儀ハ、御簾中様熊本表へ被為

一八月三日涼月院様御一周忌御相当ニ付、於天徳寺御法事御執行有

但御法養式初諸事御近例之通ニ候事

之ニ付、

正二位様海晏寺江御参詣、

夫ゟ天徳寺江御参詣被遊候

一八月十七日左之通被仰出之

御用有之候条、明十八日午前第十時参内可有之、此段申入候也

九年八月十七日

正二位松平慶永殿

七日

宮内卿徳大寺実則

一八月十八日本日午前第十時御参内御達ニ付、午前八時御出車御参

一御紋付猪口御盃 壱個

朝被遊候処、

左之御品御拝領被遊候

御扇子

五本

以思食賜候旨宮内大丞演達、御礼被仰上御退出

但シ右御拝領ハ御同列ノミニ而有之候

九月三日今午後十時三十分御側仕ふし分娩、御女子様御誕生奉恐

悦候

一九月九日御誕生様本日御七夜御祝儀ニ付御名被進、御目録を以御

家扶御使被仰付候

節具 此訓 登幾 水性 十五画 艮 富貴高名

出 典

史記大礼与天地同節

明治九年九月三日日曜誕九日命名式

正二位慶永撰

九月十日本日吉辰二付、 同断二付、 宅江御移居二付、 為御土産左之通被下二相成候 午後四時前御出門、 節子樣御儀巣鴨町弐丁目農保坂徳右衛門 益御機嫌能御寄寓被遊候

鮮鯛 弐尾

~ ~ 本 書 袖 扇奉子書紬 壱 壱壱 反 対反

(扇子絞り · 扇子書 紬

同人妻

同人母

御同列御宛

保坂徳右衛門

筆半 墨紙 壱東ツヽ

> 同 人妹

金百疋ヲ

人子供両人

木綿単物 壱反

下女下男江

御乳持 あさ

九月十一日 前田利鬯殿ゟ為御知、 故利義殿奥方松現院殿去ル八日

右者御簾中様御従父妹御続二付、

十日迄御忌懸

九月十五日午前十時

道孝

松平慶永殿

御逝去被成候条、

リ被遊候

九月十五

二付、 御座候ニ付御談示申、 二付、 相成候処一同故、 分迄二御出迎致候様被達候、 前略貴免、 入彼是延引致候而ハ如何と存候間、 麝香間詰惣代として壱人、新橋停車場迄午後第四時三十 早々御通知申上候也 本日参内候処、 此度巡番ニも候間 則先達而両公ニハ御巡幸之節惣代ニ取極 香川宮内大丞ゟ明十六日皇后宮還御 右ニ付而ハ明日之事故、 乍越爼三条西公も御参会ニ 三条西殿御行向二申合候 御通知申

九月十五日午前十一時

季知

道孝

之積二御座候也 申上候得共、 苦労相願候、 条西殿御出頭二相成候、 壱人新橋停車場江午後第四時卅分迄二御出向相成様二申来、 愈御安泰珍重存候、 明日之事二付御心得二申上置候、 其節ハ三条西殿ら御申入ニ相成候、 然者明十六日皇后宮還御二付、 万一同君差支之節ハ尊君御巡番ニ而 着用ハ通常礼服 委曲廻状二而 麝香間詰ら \equiv

九月十六日皇后宮箱根温泉ゟ還御ニ付、 車場迄為御迎御出向可相成旨ニ而、 三条西季知公御行向相成候 御同列御惣代壱人新橋停

九月廿 次第ニ御指重リ、 一日徳川慶頼卿田安卿頃日来御発癰ニ而御不例被為入候処 今午後六時遂二御逝去被遊、 絕言語奉恐入候、

正 一位様御実方御弟之御続ニ付、 御定式之通半減御忌服被為受候

但シ御忌服御届宮内省・東京府江御差出相成候

九月廿八日故徳川従一 一位樣御遺骸上野御墓地 へ御葬送ニ付、 正

位様御列中御随送被遊候、 但御神葬也

十月五日節子様御宮参り御祝儀御執行被為在候

十月十二日本日御 而当御邸江御来駕、 門様方御集会、 御投票之上左之通御撰出相成、 御令扶御提拉、 午後 十四日正 一時 揃二 二位

樣御持参二而御届相成候

族長正二位松平慶永

幹事正四位松平確堂

右 族協議之上相定候間 此段連署ヲ以御届申上候也

十月十四日 督部長岩倉具視殿

> 御 族御連印

十月廿三日細川様ゟ左之通為御知

時御死去被成候、 正四位韶邦様久々御病気之処御養生不被為叶、 右為御知御手許迄得御意候条、 今廿三日午前八 可然御取斗可

被下候也

十月廿三日

細川護久様

右ニ付御簾中様御実方御弟之御続ヲ以、 御忌二十日御服九十日

被為請、 絶言語奉恐入候

十一月十三日左之通被仰出之

被仰出、 皇后宮来ル廿日御発輿、 同日午前第七時御出門、 東海道御陸行、 新橋ら神奈川駅迄汽車乗御 西京江行啓被為在候旨

成候条、此段為御心得及御達候也

十一月十三日

宮内卿徳大寺実則

麝香間詰御当

追而為惣代御両名、 新橋停車場ニ於テ奉送可有之、 此段添而 申

入候也

同日徳川達孝様御家督御相続之旨ニ而、 宮内省江被為召候二付、

正 一位様御同家様江被為入、 達孝様御同車ニ而御参内被遊候

但シ予テ正二位様御後見之儀御承諾ニ而、 御願済二 相成居候也

御願面も御指出ニ而有之候処、 今其御書案ヲ不得、 他日索得候

上認入可申事

十一月十九日松田 テ被下之 ス、 前 常二感激二堪へサル也、 時ヲ回顧スレハ、汝兄藤吉郎余ノ為ニ頗ル忠誠ヲ尽スノミナラ

十一月十七日左之通 追而同列申合之上、 来ル廿日皇后宮西京行啓ニ付、 礼服着用参内可有之候也 九年十一月十七日 依願御暇被下候 麝香間詰宛 壱人馬車ニ而新橋停車場ニ於テ奉送可有之、

為御見送午前第五時三十分通常

式部大輔坊城俊成

十一月十

兀 Н

上婢室多

参朝光御同列御一統於御休所御酒肴賜之呢肴:

麝香間詰之方々皇后宮御対面被遊候、

本日御奉送供奉華族惣代

口取勅奏任及琉球藩人

此段申入候也

汝直人母本日午前遂ニ死去スト聞ク、 直人老母病死、 切花一 余驚愕愴然ニ堪へス、 把・金七拾五銭御筆ヲ添 往

国家ノ為ニ義烈ヲ彰ハス、 今此凶事ニ際シ追懐ノ情切也、 コレ汝両親鞠養ノ功ニアリ、 依テ霊

金幣七拾五銭ヲ奠ス

十一月廿一日節子様御儀、 二付、 畢而御退散相成候 及相談候事 任官·麝香間詰惣代迄乗御御見送相成、 詰惣代·華族惣代御対面有之、 送相成候、 として池田慶徳卿御出勤 右為御挨拶被下相成候 金五円 金壱円五拾銭 同人宅江被為入、 新橋停車場江入御、 岩佐純・ 東校教師独乙人エルニード江診察御 御奉送無之御同列ハ皇后御門内迄御見 午前八時十五分前汽車乗御 更ニ勅奏任官・琉球藩人・麝香間 田代弘随従被仰付、 樫村江 工 ルニ 第八時十五分汽車御発軔 ーード江 同人江委樓 頼

段、 十二月五日来十年大和・京都江行幸被仰出候ニ付、 左之御願書御指出二相成候 御供奉被遊度

朝ス、 以テ万分ニ報セント欲ス、今ヤ十周年ノ御祭祀ニ当リ、 翌年癸亥大政ニ参謀セシメ、 旨 明年一月大和及西京江行幸、 追遠之御叡思深感興之至ニ堪へス、 先帝臣ヲ賞スルニ積年国家ノ為メ憂慮スルノ事ヲ以テス 爾後先帝ノ寵眷ヲ蒙ル銘肝之至、 神武帝并先帝御陵御参拝被為在候 臣慶永去文久中京師ニ

費ヲ以テ、 情已ム能ハス、 御列外供奉御許可仰付ラレ候様奉願候、 伏テ願ハクハ出格ノ典ヲ以テ、鸞輿行幸之節自 ^{微臣}生前之 有之、此段及御達候也

九年十二月七日

宮内卿徳大寺実則

正二位松平慶永殿

大幸何事カ之ニ加ヘン、 此旨可然御執奏之程伏而奉懇願候也

明治九年十二月

宮内卿徳大寺実則殿

正 一位松平慶永

十二月九日左之通被仰付之

御召抱相成月給五円交付相成候事

但真崎御邸専務之事

十二月六日本日宮内省江御呼出二付御出頭被遊候処、 左之通被為

明治九年十二月

来一月大和・京都江行幸之節、 特旨ヲ以願之通供奉被仰付候事

宮内省

明治十丁丑年

別段従御手許、

月々金弐円ツ、被遣候事

同人

月一日益御機嫌能被遊御超歳奉恐悦候

月五日新年宴会二付御参朝、 勅語有之、 御酒肴御頂戴、 舞楽御

拝見被遊候

一月十七日正二位様昨暮十二月御願済、 奉被為蒙仰候二付、 為御先発本日西京表江御発途被遊候、 今般大和・西京行幸御供 御供沢

木禄平・家丁中島直蔵

午前十時四十分新橋発汽車ニ而御起程被遊候ニ付、 御方々様ニも

同日左之通被仰付之

御家従御依頼候事

沢木禄平

但真崎御邸専務、 月給弐拾円交付候事

御都合二付御家従御断被成候事 白井久人

但御改正後出精相勤候二付、 旅費代として従前御貸渡之建

物 畳·建具共被遣候事

十二月七日左之通御達相成候

テ御発途相成度、 一月大和国并京都江行幸供奉被仰付候二付而者、 且京都御着輦之節、 同地七条停車場江奉迎可 御先着トシ 二月十九日行在所御布告

御同乗、 召上、 午後二時半汽船広島丸江御乗組、 為御見送被為入、横浜中村屋二而御団坐、 午後四時揚錨益御機 御二度御膳被 嫌能

御発船被遊候、 御船中迄正四位様・村田氏寿・橋本綱維 武田

規御送り相成候

御家様ニ而ハ御乗船諸事取扱御旧臣にて林左次衛江被仰付、 但本日麝香間御同列ニ而池田慶徳様・伊達宗城様御同発相成候 同

御旧臣海軍少佐福島敬典官船を以広島丸迄御送申上候

十九日神戸御着港、 廿日西京御旅館上京三十一区木屋町三条上

ル弐拾六番地野村庄兵衛宅江御着被遊、 神戸御着ら都度々々電

報ヲ以御通信相成候

三月一日下京拾弐区四条烏丸東江入ル長刀鉾町十七番地中村半

兵衛持家江御転寓被遊候

二月廿日聖上大和行幸、(マ\) 京都御発輦二付御供奉被遊、 十七日還幸

二付御帰京被遊候

二月十七日左之通被蒙仰候

此段及御達候也

正 一位松平慶永殿

貴殿儀追而御沙汰候迄京都滞在被仰付候、

明治十年二月十七日

宮内卿徳大寺実則

十年二月十九日

西京御駐輦被仰出候条、 此旨布告候事

正

宮内卿徳大寺実則

同 1日同断

鹿児島県暴徒擅ニ兵器ヲ携へ熊本県下江乱入、 国憲を不憚反跡

顕然ニ付、 征討被仰出候条、 此旨布告候事

十年二月十九日

太政大臣三条実美

二月廿五日御簾中様益御機嫌能 真崎御別邸ゟ小石川御邸江

滞御転住被遊候

但シ昨廿四日御道具類追々御運送相成候 畝火山東北陵御参拝、 行幸御休泊割及里程概略

月十六日 兵庫県

 \bigcirc

大阪府

同

天下茶屋

堺

堺県大坂ヨリ

 \triangle

三里

道明寺 小山 里

十七日

同

凡大 北坂 ヨリ

 \bigcirc

同

藤井 里

下田

 \triangle

高田 里十四丁

同

同

同

○御泊

□△御休

凡五丁

三月十二日節子様巣鴨御寄寓ゟ被為入、

本日東校病院教師シユ

ル

· 御医師田

代

チヱ氏江診察御依頼として被為入、御家令武田正規

十九日畝火山東北陵御参拝

廿日

今井 御発輦

弘随従被仰付候

金五円

教師シユルチヱ

江

通弁樫村某江

一里廿四丁井ヨリ 田 原平

同

一階堂 里十四丁

横田 里 里

郡山 里半

廿廿 一日 日

同

凡六里二丁

奈良

同

同

立田 法隆寺 三里 里

藤井 三里

道明寺 里十八丁

凡 八 里 リ

口

廿二日

0

同

同

同

凡三里半

 \triangle

同

小山 三里 里

堺 天下茶屋 里半

大坂府

凡四里 里 ラリ

同

廿三日

 \bigcirc

同

一里半

凡男 里リ

同

廿廿廿 六五四 日日日 京都御着輦

一十七日

X

三月十日節子様御頭部御鬢先御腫物御療治之儀、 御医師田代弘達

出候

三月十六日

右被遣ニ相成候

同七百疋

京都表正二位様御手許江御呼立二付出発

武田正規

但シ横浜表迄罷越候処船都合ニ付引戻し、 陸路罷越候樣相決

し候、十八日午前出立致候、 持田弥市同行被仰付候、 四月十

二日帰東

四月十四日左之御書付御 国表江御諭達ニ 一相成候

御直書写

此段旧誼之情実難黙止 聖慮候御儀二候得者、 派出之役員御趣意柄篤卜達可相成候得共、 討滅相成候者必然二候得共、 各承知之通リ鎮西暴動ニ付、 層報国之義気を励し、 於銘々も覚悟可有之ハ勿論なから、 仍而申陳候也 迅速徴募ニ応し奮勇奏功候様有之度 今般壮兵募集之義被仰出、 去ル一月以来逐々征兵憤戦、 方今之形勢深被為悩 従其筋 不日

明治十年四月十四日

御名御両名

五月四日於西京表左之通御達相成候

来ル十七日当地御発輦、

東京江還幸被仰出候ニ付而ハ、

供奉被

可有之旨御沙汰二候、

此段及御達候也

十年五月四日

宮内卿徳大寺実則

松平正二位殿

仰付之処、

御都合も有之候間、

来ル十日前後海陸御勝手ニ東帰

千本久信殿

毛受 中根雪江殿 洪殿

四月廿五日

右者西京表正二位様御呼寄ニ付本日発足、横浜港より名古屋丸

江

乗組出帆致候

但シ廿七日御出院、 巣鴨御寓居江御帰車被遊候 同日節子樣為御療養浅草警視五病院江御入院被遊候

五月一日今般為御墓参正二位様· 正四位様御同行越前国福井 江被

仰出候

五月三日於西京表左之通御布告相成

来ル十七日御発輦還幸被仰出候、

此旨布告候事

但

一神戸・ 横浜間御航海之筈ニ候事

御同列殿

明治十年五月

三日

太政大臣三条実美

同日節子様御療治二付、 診之後十二時ゟ二十分時間御療治申上、 午前九時過ゟ東校病院江被為入、 無御滯相済、 無程喫乳暫

教師熟

時御寝、 四位様ゟ直ニ西京表江電報ヲ以被仰進、 御目覚後御気先御平常之通、 益御機嫌能恐悦奉存候、 翌日御答報到達致候

五月八日御滞在中ら左之御願書御指出相成候

今般御用済帰東可仕之処、 石川県下越前国祖先墳墓江参詣仕度

候間、 往来ヲ除之外二十日間御暇相願度、 猶同地

ら直

に帰

京

仕

此段奉願候也

明治十年五月八日

正二位松平慶永

宮内卿徳大寺実則殿

五月十一 日正四位様兼而御願済、 福井表江為御墓参本日御発刺

候二付、 新橋汽車被為召横浜江被為入、 日御逗留 翌十二日御乗組御抜錨相成候、 十四四 日神戸

同処ゟ御乗船之処、

出帆延引相成

正

謁 御着港、 十七日御暇乞御参内、 午後五時西京御着被遊候、 前後四日御滞京相 十五日天機御伺、 成候 十六日 御

時江州琵琶湖御乗船、 五月十八日午後三時正 十九日午前五時塩津御着津、 一位様 正 一四位様西京御発車、 同日午後六時 同日午後八

今庄

御止宿

五月廿日午前七時過今庄御発駕、 井御着、 初御懇意之面々被為召御酒肴被下候 足羽山山田仁右衛門宅へ御投宿相成候、 湯尾駅ゟ御乗車、 同 午後五時 日夕松平 -鷗客 頃 福

同廿二日 五月廿一日終日御機嫌伺出頭之面々御逢被遊 両公孝顕寺· 運正寺・ 瑞源寺・ 足羽宮 黒竜宮ヲ始諸

肴被下之 社御参拝、 午後河津直人外拾四名御招、 御哥会被遊 畢 市 御 洒

寺御参詣被遊候、 同廿三日午前八時両公藤島神社御参拝并御兜御奉納、 同廿四日午前八時ゟ両公松岡天竜寺江御参詣 夕粟崎木谷藤十郎御用達主 午後神祭御改正一 条其他種々御内評有之 御帰路平岡茶園 夫ゟ大安

御覧、

御招御酒肴被下候

同廿五日午前八時両公御出車、 江 内田 被為入、 衡 旧士族 土生忠被為召、 統江謁見被仰付候、 区内実況御尋并御酒肴被下候 孝顕寺・ 安養寺・運正寺三ケ寺 午後三大区区長萩原縫

同廿六日午前八時同前、

佐佳枝廼社神江被為入、

世話方町

人共

大谷光勝殿自画 所御巡覧相成候、 御延見、 夫ゟ病院 葉被遣相成候、 午後東御堂博覧会御見物并輪番所へ被為入、 師範学校・小学校・女学校・活版所・化学 午後水谷酔月初二十壱名御招

御酒肴賜リ候

側向之面々御招酒肴賜之 等御逢、 同廿七日午前八時同断 夫合心月寺所々御拝被遊候、 於運正寺旧士族 午後泉邸へ被為入、 ・官員 教員・区戸長

日之残御招御酒肴被下之 同廿八日午前八時両公東光寺・安波賀御参拝、 夕方元御側向

立寄、 夫
ら
泉
邸
へ
被
為
入
、 御重器・御世譜御覧、 畢而 御懇意連

同廿九日諸御寺御改正之内議、

午後三時過ゟ両公千本久信宅御

同三十日両公西御堂輪番所へ御立寄、 御遣シ、 中江御酒肴被下之 夫ゟ九頭竜川舟橋河原へ被為入、 大谷光尊殿御自筆之御歌 元五社隊之面 一々ヨ

漁猟得物献呈二付御酒肴被下之

候事、 同三十一日午前八時春山小学校 御参拝、 六月一日午前八時両公御大礼服御着用、 様十三回御忌御法事、 午後六時ゟ商家有志輩二十三名被為召御酒肴被下之 夕方右境内御遊歩被遊候 於運正寺御引揚御執行二付、 · 大和小学校御覧、 佐佳枝廼社 御参拝被遊 夫ゟ彩雲院 東照宮江

領之宗久御短刀御奉納被遊 一日午前八時前同断 秀康卿尊前御参拝、 此日卿神君ゟ御

但 シ両日トモ御祭式中御詰被遊、 祭文御読誦御奉納被遊

両公御大礼服御着用之御影、 於松玄院庭內御写真後藤東作江

仰付、 葉ツ、泉邸江御残シ相成、 一ト通リ ハ 御持参之事

右両日共御神前江大鯛壱折 · 榊被供候事

午後三時過ら笏谷長谷川績別宅江被為入、 誹諧御催 一付秋 田 松

髯外七名御招キ酒肴被賜之、 正四位様二者御中座二而 佐佳 枝社

江 被為入、 博覧躍暫時御覧、 午後六時過御帰館被遊

同三日午後五時頃ゟ於清嵐亭、 石川県権令桐山純孝殿御招ニ付

両公被為入酒肴賜之

信 ・毛受洪・武田正規御相伴被仰付候

同 五. 日午後六時過松平鷗客初二十五名御酒肴賜之

但福井支庁詰長官三橋并相馬朔郎御 招 外 中根雪江 千本

同四日午前八時前両公木田小学校開業式有之ニ付(マ

六月六日午前八時前益御機嫌克福井山 田 仁右衛門宅より 御発 車

同所迄松平鷗客初御見送申上御酒肴被下之、

午

後六時今庄駅後藤覚左衛門江御止宿被遊候事

武生畳屋御昼休、

但今庄迄為御見送大谷如水・久世久・本多七平 · 小村耕輔 八

百 甚・東郷屋 生駒広介罷出

同七日午前七時前今庄御発駕、 中 河内御昼休、 木本駅御止宿

> 同 八日午前木本御発車、 関 ケ原御昼休 起駅御止

同 九日同断起御発車、 宮駅御昼休 岡崎駅御止

同 十旦 同断岡崎駅御発車、 豊橋御昼休、 浜松駅御止

宿

同 十一 H 同断浜松御発車、 日 坂御 屋休、 岡部 御 止宿

宿

同

十二日

同

断

岡部駅午前九時御発車、

興津

宿御昼休、

沼津駅御

止

同 十三日 同 断沼津御発車、 三島ゟ御駕乗、 箱根駅御昼休、 大磯

止宿

同 十四四 日大磯御発車、 十時前神奈川御昼 休 午後三時過益 御 機

能御着邸被遊候、 同日夕御待受罷出 候面々御酒肴賜候

同御住居二被為成候五郎御召連ニ相成、福井表より中根雪江及三木宗五同御住居二被為成候但今般京都表ゟ福井へ被為入候節、京都茶師三木宗 御発駕前真崎御邸御住居之処、 本日ら小石川御邸へ御方々様御

御郎 召声し、 相此表候へ

六月十五日午前十時両公御同車、 宮内省ヲ初所々御勤相成

六月十五日左之通御願書御指出二相成候処、 直 一御許可 被仰 茁

是より御順番を以御当直御勤被遊候 今般帰京候二付、 御駐輦御留守中勤番相勤度、 此段奉願

候也

明 治十年六月十五日 正 一位松平慶永

宮内大輔万里小路博房殿

本日御当直二付御参内被遊候但シ以後都度々々

六月十九日

六月廿八日本日午前九時両公御同車村田氏寿宅へ被為入、 家政向是迄内外御依頼有之候得共、 向来一 層御依頼被成度、 右者御 依 而

態

||々御出車相成候

七月二日午前九時御当直二付御参内、 酒肴御拝載二相 成候、 右者御留守中御当直御勤被遊候御慰労トシ 夫
ら
大
宮
御
所
江
御
参
上
、 御

テ賜候也

七月七日節子様御儀松平確堂様御養女二被為成候御儀 指出之処御落手相成候 一部長松浦詮殿御宛二而御名并二確堂様御分共、 華族会館江御 御内伺書

被為在候御事故、 但シ節子様御儀、 表向御叔姪之御続柄二被為当候御事二候得共、 往々康荘様御配偶二 今般御熟談御願書御指出 被為成候御儀御内決之処 相成候、 素々御血縁ハ不 右 般

> ニ有之候、 松平確堂様御養女と被為成、 御願面 ハ茂昭公御譜上ニ相認爰ニ省之 然ル上御結婚之事ニ可相成御次第

七月九日華族会館ら節子様御養女御内伺書江御指令、 郵便を以

達相成候

七月十日青松院様七回御忌御相当二 様 正四位様御出車、 天徳寺ニ於テ御法事御執行有之、 付、 午前七時正 鍋島筆 御簾

姫様ニも御参詣 御家御法事畢而 筆姫様より御附御法事御執行

但天徳寺方丈ら御膳部指上、 御供之面々へも賄差出

相成候

殿装飾、 七月廿三日本日午前九時御神祭御改、 初御方々様御列坐、 上野東照宮祠掌杉浦勝雅外弐名、 畢而午前九時過ゟ御祓式并御移霊式御祭典被為行、 + 一時過御式無御滞被為済候 伶人三名午前七時前来邸、 御移霊式御祭典御執行二付 御神

細御祭典詳細記録江記載有之候 但シ御神祭御改正ニ付而 正穀及杉浦勝雅等御謀り、 遂二今日之御運ヒニ被為及候事、 公当初ら種々御心配被為在、 清水

七月廿九日聖上 十時相達候二付 左之通御達ニ相 皇后宮神戸御抜錨被遊候条、 成 宮内省江電 夜

候

明三十日聖上・皇后宮還幸ニ付、 午前五時通常礼服着用、

停車場江奉迎可有之候也

十年七月廿九日 式部頭代理式部権助橋本実梁

正二位松平慶永殿

追而新橋停車場ヨリ皇居迄供奉被仰付候ニ付、 馬車用意可有之

此段申添候也

右ニ付為奉迎、 本日午後七時三十分汽車二而横浜港江被為入、 今

晚同所林庄五郎宅江御投宿被遊侯、 為御先番御家従佐野久横

浜表迄罷越候

七月三十日於横浜表主上・皇后宮御奉迎、 夫
ら
汽
車
御
随
駕
、

停車場ら御馬車ニ而御供奉被遊候

八月二日先般来御滞京中御世話被為成候御方々江、 御直書添二而

左之通御贈相成候

徳大寺宮内卿殿 氷砂糖壱箱

宮内少輔殿 前 同半同

香川宮内大丞殿

百

同

桜井宮内大丞殿

八月三日聖上御留守中御勤番御勤被遊候二付、 左之通御拝領被遊

> 越後縮 弐反

横浜

御扇子 五本

処、 八月九日御前様御儀本日午後六時御分娩、 即時御卒去被遊奉恐入候、 御追謚公思召ニ出テヽ、 御女子様御誕生被遊候 稚細石媛

命ト称シ奉リ候

八月十五日為天機御伺御参内、 左之御品御進献相成候

基流鳥子紙 弐百五拾枚

右御取斗方、 仕人玉村荘次郎出^藩江御依頼相成.

供之、 八月十七日池田慶徳様御儀、 御帰東ニ付、 御当主様御生母江御菓子壱折ツ、被進之 為御柩拝被為入、 先日於京都御逝去相成候処、 榊壱対・鮮鯛壱折・御菓子壱台被 御遺骸

但慶徳様二者水戸斉昭卿御子二而、 当時華族会館副督部

公二者従来之御親懇二被為在候

八月廿一日御前様先般来御水腫之御容躰、 憊益々御増進、 分娩も被為在、 岩佐純初伊東方成・池田謙斎老等御依頼種々御療養、 御疲労漸次御加はり、 御昏睡状二被為在候処、 御病勢時々御緩急も有之候処、 今晚 二時頃ヨリ頻りニ御煩問 午後二時頃ゟ次第二御危 加之御懐胎中之御事ニ **兎角御快路之御運** 既二御 御衰

葬儀も無御滞被為済、 文等も被為在、 篤之御場合被為迫、 公奉初御方々様御愁嘆無申斗御事二奉伺候、 御慈愛之御情実筆舌之所尽二無御座候、 同三時三十分遂二御逝去被遊、 廿七日両公御同車二而海晏寺御塋域江 御棺拝之節御吊 絶言語奉恐入 廿六日: 御参 御

拝被遊候

八月廿八日公従来之御手記或ハ御書翰類等御仕分之儀、 被仰付候処、 整頓二付其旨申上候 中根雪江

九月二日静寛院宮薨去二付、 左之通部長局ゟ御達

候処、 有之候、 一品親子内親王兼而御所労ニ付、 御養生不被為叶、 依而本日ゟ二日間、 今二日午後六時十分薨去相成候旨電報 出御不被為在候旨被仰出 相州塔沢ニ於テ御養生被為在 且皇太

后宮・皇后宮ニも三日間御遠慮被為在候事

宮内卿徳大寺実則

明治十年九月二日

前書之通被達候条、 本日ゟ三日之内為天機伺参朝可有之候也

九月三日

岩倉具視

松平慶永殿

追 而 本文至急件ニ付 般へ直達候条、 例之通不及御廻達候

故静寛院宮御履歴御手記中抜粋

一品親王諱親子幼名称和宮、 カズ 仁孝天皇第八皇女、 生母正五 位下

> 家茂薨、 極還東京、 尚許之釐、 守典侍橋本経子、弘化三年丙午閏五月十日降誕于外祖橋本実久 文久元年四月宣為内親王賜名、 薙髪号静寛院、 十三日葬于増上寺故将軍之兆域 降于江戸明年二月十一日行合巹之礼、 明治六年三月叙三品、 先是征夷大将軍徳川家茂請 十年九月六日護 慶応二年七月

九月三日静寛院宮昨二日薨去被為在候旨被仰出候二付、

天機御伺御参朝被遊候

九月五日左之通御通知有之候

今般御凶事二付、 麝香間席別紙之通申合相成候二付、 申入候也

十年九月五日午後第 時

道孝

忠能

御名殿

同列心得

静寬院宮尊骸明六日還御二付、 小礼服着用麻布御殿へ参上之

事

但御程合不相分候間、 午後一時迄二一卜先参集之申合、 其

場処大村純熈殿邸ヲ借用候事

御棺前拝礼先来ル七日午後参上ニ打合セ、 併今一 応日限等宮

本文参上之節献備物人別ニ御香差上候事ニ決シ申候、 右御

品江悉皆長谷・池田・道孝等ニ而出来引受ニ申合相成 伊達宗城君御御(衍)

御葬送之日者 列より惣代トシテ壱人供奉、

勤仕、 自余增上寺江御先着之申合、 併シ此儀も一応御達シ有

事

右御凶事二付御機嫌伺献物者、

惣シテ不及其儀候義ニ治定候

之候筈也

所労等二而不参之節者名代二不及候事

同 日宮内省ら布達

一品親子内親王今五日相州塔沢御発、 明六日同宮御邸江御着相

成候条、 明後七日同宮御邸江礼服着用参拝可有之、 此段及御達

候也

十年九月五日

宮内卿徳大寺実則

九月六日午後十二時過靜寬院宮御尊骸御着棺二 一付、 為御奉迎 御 同

静實院宮御着棺二付、 卿手記 邸江被為入候 麝香間同列申合、 午後第一時迄二麻布市

兵衛町大村純熈邸江参集候事、 茶菓・煙草盆食卓二設有り、 同

列 統相揃午後一 一時中山忠能ヲ初十二人静寛院宮御邸江参上、

麝香間扣処ニ候ス、 第 喪主松平確堂・宮

内卿

門前江奉迎ス、 ・宮内省奏任以上御門内ニ奉迎、 同時十五分御通棺御玄関着御、 一時御着棺之報アリ、 中 山忠能初御玄関前中御 御馬車ゟ御棺ヲ

> より中山忠能初参拝之儀被示、 飾付有之、増上寺方丈阿弥陀経読誦御回向有之、 宮之家令ニ告ケ名刺ヲ指出ス、 出シ御殿江入御、 中山始一同元之扣処江参り、 御座所江御棺を安置シ御供物御 喪主并御内儀 ·徳川家名代拝礼 今日奉迎之旨を 右相済宮内卿

静寬院殿二品内親王好誉和順貞恭大姉

畢宮内卿初勅任官・麝香間詰・奏任官拝礼焼香有之

宮内卿ゟ明七日御参拝之儀御達申候処、 本日御参拝相済候二付

不及其儀旨中山忠能江通達有之候事

奠進ス、七日九条道孝ゟ静寛院宮御家令迄相廻ス約定之事、 右畢而何レ茂四時ニ至り退散候事、 麝香間詰より御香を人別ニ 御

香木取扱長谷信篤江依頼ス

九月七日左之通会館ら御達示相成候

故親子內親王御遺骸昨六日同宮御邸江御着相成候二付、

第四部長上杉茂憲為惣代致参拝候条、 為心得相達候也

明治十年九月十日

部長局

同日九条家ゟ御廻達

金弐円五拾銭

右十八割御 一方分金拾弐銭 <u>T</u>.

右者静寬院宮江御献備沈香台代、 前書之通二相成候間、 御序之

節当家江御指出可被下候也

十年九月八日

九条従一位家は

御立礼、

御跡ら御参場、

御霊屋御拝殿廊下正面ニ御棺安置、

廻

一九月八日御同列江左之通御達

合午前十時麻布宮御殿江参入可有之、此段申入候也来ル十三日午前故二品親子内親王御葬送二付、為奉送同列被申

明治十年九月

式部頭坊城俊政

追而衣体之儀者黒帽・黒服着用、且奉送之節馬車用意可有之候

也

同日静寛院宮御霊前江左之通御献備二付、御使者山本武相勤、御

取次三田貴志江御品相渡、御口上申達候

一蒸菓子 壱折

九月十三日静寛院宮御葬送ニ付午前九時御出車、御先着として芝

増上寺江御詰被遊

御 門外ニ而御下車、 前第十時中山殿御始御馬車二而、 クコート、 省香川大書記官江御名刺御通シ天機御伺、 同列御惣代者別ニ御休息所之設アリ、 但シ静寛院宮御葬送ニ付、 同 文照院殿御霊屋二天門前ニ而御奉迎、 本日麝香間御惣代伊達宗城殿為御奉送宮御殿江、 広大院殿御供所江 午前第九時御馬車二而御参朝、 芝増上寺文照院殿御霊屋二天 中山殿初御休息、 第 御衣体御黒帽フ 時前注進有之御同列 御棺御通行之節 但伊 達御 宮内 П 午 ッ

> 経諸宗僧侶 主・女官・ 廊御右大臣・ 判任官迄拝礼 御外戚并御一族及宮内省勅奏官員着床、 参議 中山殿御始麝香間御 ·勅任官 畢而御同列御焼香御拝礼、 ·麝香間御惣代御着床、 同 非役華族方着床御法要 畢而御退場 御右廻 御右廊下諷 廊喪

通禧殿ゟ左之御書面御渡ニ相成候多ニ付副督部長東久世通禧殿正面着床、上杉・山内両部長侍床、九月廿日午後一時会館江御呼出ニ而御出頭之処、岩倉督部長御用

奉書半切 従五位松平直応

壮年ノ身トシテ游惰不行跡ノ聞有之、向後注意勉学可有之事

十年九月二十日

督部長岩倉具視

又左之通御達

維新以降法令較や寛ニ束縛漸ク解ケ、商業ヲ営為スルモ亦妨ナキヲ以テ、浮利ヲ僥倖シテ家計ヲ誤リ、甚シキニ至テ身代限リキヲ以テ、浮利ヲ僥倖シテ家計ヲ誤リ、甚シキニ至テ身代限リナルニ由リ、謬テ其度ヲ失スルニ非サルナキヲ得ンヤ、今般情状ヲ酌量シ寛宥シテ以テ其宗族長ニ達シ、旨ヲ本人ニ伝へ悔悟状ヲ酌量シ寛宥シテ以テ其宗族長ニ達シ、高業ヲ営為スルモ亦妨ナ

明治十年九月廿日

督部長岩倉具視

同日当御邸江御一族様御集会、松平直応様御呼出ニ而御譴責書御

御執務被為在二付、

就中諸事御斡旋被遊候事

之、

御忠告ニも相成候得共、

依然御謹慎之御模様不被為在也、

此頃公御族長

渡之処、 御不快之旨ニ而御来邸無之、 定安様御代理ニ而翌廿 一 日

直巳殿御両方江御渡、 御家扶松本新も出頭

直応殿御請書

私儀

兼而遊惰不行跡之聞有之二付、 注意勉学可仕旨御諭達之趣、 恐

縮之至ニ御座候、 如何共前日之儀悔悟改心仕、 御主意銘肝屹度

相慎、 実効相立申候、 依而御請書如件

督部長岩倉具視殿

明治十年九月廿

日

従五位松平直応

右部長局へ御差出ニ付御副書如左

族松平直応儀兼而遊惰不行跡之御聞へ有之ニ付、 今般御厳責

ヲ蒙リ奉恐入候、 直ニ御達書直応へ相渡候処、 深ク恐悚則別紙

御請書差出候ニ付、 御届申上候也

明治十年九月廿二日 廿四類族長正二位松平慶永

督部長岩倉具視殿

御次第二被為運候御事二候、 得共、更ニ御悔悟之御容子も無之、遂ニ会館迄之御聞込と相成、前条ノ如キ 松平直応様元機御儀、 配も被為在、 御旧臣ニ於ても百方憂慮罷在、 近年兎角御不行状ニ而、御養父定安様御初種々御心 尤其已然御一族様方ニも屢々御会合御相談も有 経年来度々御警戒も御加相成候

> 遊候、 青山御所へも同断御参上相成候但通常

御布令

今廿三日正午十二時権典侍柳原愛子分娩、 皇子御降誕被遊候条、

此旨布告候事

明治十年九月廿三日

太政大臣三条実美

皇子御降誕被遊候二付、 在京奏任官已上并有位華族、 本日ゟニ

日之間宮内省江参賀可致 此旨相達候事

但通常礼服

九月廿三日

太政大臣三条実美

九月廿五日左之通御布告

九州地方賊徒平定候趣、 本月廿四日総督二品熾仁親王ヨリ電報

ヲ以奏聞有之候条、 此旨布告候事

太政大臣三条実美

松平慶永殿

九月廿七日左之通御指令

皇子御降誕二付、

来ル廿九日御祭典被為行候条、

通常礼服着用

午前第十時神殿参拝可有之候也

十年九月廿七日

九条殿御初

式部頭坊城俊政

九月廿三日権典侍柳原愛子殿分娩皇子降誕二付、 為御歓御参朝被

御同列宛

皇子御降誕ニ付来廿九日餔宴賜候条、 通常礼服着用午前十 時

皇居江参上可有之候也

十年九月廿七日

式部頭坊城俊政

九条殿御初

御同列宛

追 而 不参之節者当寮へ可届出候也

九月廿九日午前九時御出車御参内プロツクコート。御同列十二方式部 寮江御名刺御指出ニ而宮内省江恐悦被仰上、皇子本日御命名ニ付

宸筆写御拝見被遊候

勅任官・麝香間詰神殿御拝礼、 第十一時三十分頃御学問所江出

大臣・参議・麝香間

餔宴中陸軍楽隊奏楽、 右大臣祝詞御奏読、 立礼、 天皇陛下入御、 勅答御朗読、 御料理御折詰二而御退出 同御立礼、 各御着床

祝詞右大臣奏上

陛下 吉辰ニ方リ斯ノ祝宴ニ列ス、 爰ニ皇子降誕ノ命名ノ慶儀ヲ行ハセラレ酺宴ヲ賜フ、 ノ聖寿無彊ト、 同ク皇子ノ芳齢万歳、 何ノ欣幸力之ニ尚ンヤ、 且皇族ノ益ス繁衍盛 臣等斯ノ 乃チ天皇

昌ナルヲ祈リ奉ル

勅答

爰ニ命名ノ慶儀ヲ行ヒ、汝等ヲ会シ賀宴ヲ開ク、 汝等述ル所ノ

祝辞朕深ク之ヲ欣フ、汝等朕カ喜慶ノ意ヲ体シ、

其レ能ク歓ヲ

公御賀章御詠進左之通殿・伊達宗城殿・長谷信篤殿御同様御詠進相公御賀章御詠進左之通中山忠能殿・九条道孝殿・三条西季知殿・嵯

皇御子の天降りますけふの日をことほきまつる国乃民草

御退出より久我正二位殿方江被為入衛所内建宮江御参上御目見被仰

上候

九月 虎烈刺病流行之兆有之二付、予防剤御拝領ニ相成候(マ、) 賜候間、 相成候得共、尚又侍医江薬品調剤被仰付、 虎烈刺病流行之兆有之ニ付、 別紙心得書相添此段申入候也 既ニ内務省ゟ予防法心得方等布達 思召を以一壜ツヽ下

明治十年九月廿五日

宮内卿徳大寺実則

薬瓶壱

正二位松平慶永殿

九月廿六日中根雪江先般県地ゟ陪随御邸内在留候処、(マヽ) 其旨県地江電報ヲ以通知 之処爾々無之二付、 廿八日岩佐純病院江入療相成候、 **倅牛介早々出府可有之旨、** 此表親族江も夫々通達相成候 然ルニ追々不軽容体ニ付 御家令ゟ通達相成 此程ゟ不快

譴責之御一条ニ付、向後御勉学御ケ条書ヲ以、御一族様江宛御指九月三十日松平直応様御家扶参邸、直応様御儀過日華族会館ゟ御

出相成候

はたますが、またまでは、 御嘆惜思召候、遺体真崎御邸江御引移シ、厚ク御取扱被成下候、 次第二重症ニ相迫リ、遂ニ今午前二時三十分病死、旧功之臣深ク 十月三日中根雪江兼而来脚気症ニ而、岩佐純病院江入療有之候処、

但雪江遺骸引取方之儀沢木禄平江被仰付、岩佐痘午後公同邸江被為入、香花御手向被下候

長持中江納メ警固罷越候事、且又右之段引取候段、真崎区務所但雪江遺骸引取方之儀沢木禄平江被仰付、岩佐病院江罷越差向

江相達候也

十月四日御家令武田正規真崎御邸江罷越、雪江遺骸納棺式取斗、

公御白御召服賜リ、背面江御詠哥御認被遣候

迄之次第逐次申聞ニ相成候、及墓地品川海晏寺御塋域内江埋葬等一十月七日中根牛介福井表ゟ着、御家令ゟ雪江病中之次第より今日

之儀、牛介願通御認可相成候

一十月八日市谷八幡祠官室賀竹堂儀従来雪江知人ニ付、同人江祭主

御依頼相成候

同日雪江埋葬事件、祭葬師井上吉次江御申付相成候

十月九日華族部長局ヨリ左之通通達有之候

来ル十六日華族学校江聖上・皇后宮親臨被仰出、同日開業式執

有之、若指支之節者隠居・嫡子・孫之内一人名代トシテ出頭可

当日午前第七時無遅々戸主通常礼服着用同校江参集可

行候間、

致、宗族触下可相達候事

族長触頭之面々者、戸主ニ非スト雖トモ、親臨之日通常礼服着

用出頭可有之候事

ニー 注訳に 気の へい 買い事 一来ル十六日親臨之日名代差出シ或者不参之輩ハ、来ル十三日正

午十二時迄ニ本局へ必可届出事

若シ指支之節者隠居・嫡子・孫之内壱人出頭可致候事一為習礼来ル十四日正午十二時卅分戸主之輩同校江出頭可有之、

族長触頭差支有之節者、当日并習礼共族中触下ニ於テ名代指出

候事

右之通宗族中江無遺漏通達可有之候也

十月九日

部長局

追而本文通常之儀、英語「フロツクコート」ヲ用ヒ、帽ハ従前

之通可心得事

1

来ル十六日華族学校江聖上・皇后宮親臨、同日開業式執行、夕

午後四時同校江御集会有之度、 御同伴有之度、 兀 [時祝宴相開候ニ付、 御出頭之人名御取纏メ、 兼而館長ゟ御談合致候通、 若妻女御指支之方者家内女華族

館 明 治_{(マ} 江御差出有之度、 年十月 此段族中江御通知有之度候事 華族会館

追 而同伴婦女御衣体之儀ハ紋付御着用有之度候也

十月十日両公真崎御邸江被為入、 老公御祭主被遊候、 神官室賀竹堂・美濃部銓出頭、 雪江祭葬之祭典御自身二被為執 但供物七台都

而御家ら被成下候

十月十一日午前二時雪江発棺二付、 長谷川皎見斗として被遣、 葬被為入候、 同断ニ付御家従沢木禄平真崎御邸ゟ為見送被遣候 佐野久儀ハ真崎為居守罷越候 午前六時両公海晏寺江為御会

十月十三日左之通御触達

従来特別御尽力有之候末、 候故祝宴相開候間 同日午後第四時御出校被下度候也 遂ニ来ル十六日華族学校開業式執行

十月十三日

松平慶永殿

同日本年元明石様ニ而御祖先松巖院様弐百年御忌御相当ニ付、

松

会館長岩倉具視

来ル十三日正午迄ニ本 妻女携帯之輩 二付、 平直致様御夫婦御菩提寺西京禅林寺江御参詣、 御 族被仰合、 右御書面御添御香奠被進二 近々御発途可被 一相成候

ヲ表シ、該香奠ヲ閣下ニ委托、 之至ニ堪へス、依テ一族ヨリ別紙目録ノ如ク、 ラル、ハ、允二閣下ノ追孝報本ノ芳志ハ一族ニ於テモ泣血感佩 西京禅林寺君墳墓ニ千里ヲ遠シトセス、 今明治十年ハ閣下御祖先松巌君二百年ノ忌辰ニ遭遇スルヲ以テ、 閣下照亮セヨ 松巌君ノ霊前ニ供センコトヲ希 令室ヲ携ラレテ拝詣セ 乍些追懐ノ寸誠

明治十年十月十三日 香奠目録金三円十二銭五厘 廿四類 一族総代正二位松平慶永 御一 族御家ニ応シ御出金 御印

同断二付御答書

ヲ伝ヘラレンコトヲ、 処、発途ノ期已ニ明日ニ逼ルヲ以テ、 供シ且霊魂ヲ慰スヘシ、 喜スヘシト、 深ク感謝ノ至リニ堪へス、 院ノ霊前ニ供シ、懐旧ノ好情ヲ修セラルヽノ厚意ハ、余ニ於テ 京東山禅林寺ニ詣至スルニ依リ、 芳墨拝読、 維明治十年ハ乃祖松巌院ノ二百回忌ナルヲ以テ、 即贈ラル、所ノ香奠ヲ齎ラシテ、 時下秋冷閣下自愛セヨ 依テ一族諸君へモ厚意ヲ拝謝ス可キノ 定テ知ル松巌院ノ霊魂モ地下於テ歓 従 一族諸君為香奠金若干松巖 仰願ハクハ閣下ヨリ謝辞 松巌院ノ霊前ニ 西

二位松平慶永君閣

明治十年十月十四

 \mathbb{H}

従四位松平直致

十月十四日

十六日御延引十七日臨幸被仰出候間、総而十六日触達之通御心

得有之度、此段其族中江御通知有之度候也

十月十四日

部長局

一十月十五日

間、正午十二時卅分正妻相携出校候輩者内謁見被仰付候、尤戸来ル十八日華族学校江皇太后宮午後第一時御出門行啓被仰出候

仰付、此段族中触下候御通知可相成候事

主ナラスト雖トモ、

有位二而正妻同伴出校相成候得者謁見可被

十月十五日

華族会館

追而男子通常礼服女子ハ紋付たるへき事、十八日出校正妻人名

者十七日学校江可届出事

一族ハ布告之序追書ニ、十八日出校正妻人名ヲ十七日従御名々

学校江御届可有之事

十月十七日本日聖上・皇后宮華族学校開業式江臨幸ニ付、午前五

時過御出門御参校被遊候、右ニ付公麝香間御惣代トシテ御祝詞御

朗読被遊候

御祝詞

族学校ニ於テ開業ノ型式ヲ執演ス、斯日ヤ正シク至尊ナル我天明治十年第三回水曜日ヲ以テ既ニ輪奐ノ美ヲ備テ落成シタル華

輩ニ望ム、篤ク聖意ノアル所ヲ奉体シ、 嗟夫満堂驩娭ノ祥雲ヲシテ該校ニ靉靆タラシムルト否ラサルト サルヨリハ、 ルニ蕪辞ヲ以テスルモノハ、 ニ収メンコトヲ夙夜トモ懐胞ニ諼ルヽ勿ルヘシ、 全シ、自今有数ノ恩光ニ触感スルノ心念ヲ把テ、 シテ洪益ヲ社会ニ熈メ、 仰テハ帝室ヲ翼戴シテ徽猷ヲ国是ニ賛シ、 シ、以テ発育ヲ天賦 深ク佳賞スルニ足ルアツテ辱クモ暗ニ叡感宸覚ニ奉協スルアラ テ我輩ノ娓々タルヲ待タン、 シトノ特許ヲ蒙ルカ如キ、 勅諭ノ徳音ヲサヘ拝稟スル佳会ニ値ヒ、 皇陛下・皇后宮両柱ノ竜輦鸞輿ヲ去ル天顔咫尺ノ地ニ迎奉リ、 顧フニ多年ノ成績如何ニアルノミ、 亦焉ンソ寵眷ノ優且渥ナル此ノ如キニ至ランヤ、 ノ智徳ニ与へ、 以テ真成華族タルノ責任ヲ我皇域ニ完 其崇邵誉ノ賀スヘク祝スヘク、 是然シナカラ該校創設ノ主旨タル 其意竊カニ此一点ニ存スレハナリ 淬励ヲ固有ノ才能ニ施シ、 **亹々トシテ斯学ニ黽勉** 予輩敢テ我同族ノ子弟 加旃本校院名ヲ用ユ 俯シテハ士民ニ率先 好結果ヲ奕世 爰ニ聊カ祝ス

勅語

クハ汝等子女ヲシテ黽勉講習セシメ、以テ皇祖ノ前烈ヲ恢張セ就学セシム、朕今先志ヲ紹述シ本校ヲ名ケテ学習院ト号ス、冀シ嘉スヘシ、嘗テ仁孝帝京都ニ於テ学習院ヲ建テ、諸臣ヲシテ朕惟ルニ汝等能ク旨ヲ奉シ此校ヲ協立シ、開業ノ典ヲ行フ其志

皇后宮令旨

日

く勉め学はん事を望む

号を賜ふを恐之喜ひ思へり、今より後生徒等の昔にまさるハ善といへとも心に之を慕へり、今日親しく此校に臨ミ、主上の院昔し嵯峨帝の皇后嘉祥年間橘氏の為に学館院を設給ふ、我菲徳

十月十八日皇太后宮華族学校江行啓ニ付御出門、御参校相成候

皇太后宮令旨

華族の学校いてきとゝのひて、その業剏しむる礼行ひし日に、

今上・皇后の幸ありしよし聞て、われもその処に臨ミ、この

成ゆくへきさまを見て、いたく歓ひおもへり、今より後月に

らは生徒をすすめ導き、生徒ともは学長のおもむけに随ひ、そへ年に随ひ、いよく〜ますく〜とさかに行ハるへく、学長

かたミにいそしみ勉めよかし

皇太后宮ゟ金参百円を賜ひしとそ

今般華族学校江行幸有之二付、右入費正二位様御発起人之御

廉を以、金拾円御差出ニ相成候

頭候処左之通被仰出候ニ付、正誼承置候旨ニ而辞令書手授相成候十月廿三日宮内省ニ而堤正誼ゟ御家従之内壱人出頭候様申来、出

中根牛介

父雪江死去ニ付思召ヲ以、為祭資料別紙目録之通下下賜リ候事(衍)

明治十年十月廿三日

宮内省

目録 金五拾円雪江墓前江御告達相成候

十月廿五日松平直応様御離婚之御届御差出ニ付、部長局ゟ御呼立

二付御参館、御問合之件ニ付左之通御答ニ相成候

縁い直応ゟ望之儀哉、御答伏見宮ゟ被仰入ニ而候、旨ク猶宗族間直応離縁之儀一族協議之上ニ有之候哉、御答間違無之、問離

長ゟ書付指出候様との御事ニ付、左之通部長南部信民殿江御指

山相成候

但シ御書付部長局ニ而御出来御捺印ノミ被遊候

松平直応ゟ別紙届書指出候ニ付調査候処、不都合之儀無之此段

申上候也

明治十年十月廿四日

松平慶永 印

十月廿六日左之通被仰出候旨ニ而御達相成候

東京府下第四大区一小区神田錦町三丁目イ壱番地、壱万三拾九

坪九合三勺、特別之思召ヲ以華族学校用地として下賜候旨被仰

出候事

明治十年十月廿四日

宮内省

一同日左之通御達相成候

念及御通知候、例之通族中江御通知有之度候也去ル十七日学校江親臨被為在候節校名ヲ学習院ト賜リ候条、為

御決評相成候

同日松平直応様御養父定安様江、 様ら御相談相成候、 且直応様ニも為御相談御来邸相成 左之趣御願相成候旨二而、 定安

憐愍被下、 懸心痛罷在候処、 斗被下度悃願致候也、 縮之至ニ候間、 私儀昨年春紛紜、 上も兎角ニ実効相立兼、 此上一家ニ関し候様之儀醸シ候而ハ、 此段御評議願上候、 断然退隠致し精々相慎度奉存候間、 爾来彼是一身上之儀、 元来懶惰之生質ゟ意外ニ失体相重ナリ、 恐惶謹言 已二先般会館之御沙汰も有之甚恐縮仕 且退身後之御所置等、 御親族方江も御配 祖先始 何卒情実御 族江対し恐 可然御取 慮相

十月廿六日

松平直応

別紙内存之通退隠致候上者、 万々相応之場合二相成候様、 猶追

々之処も御相談可申上候間、 呉々可然奉願上候、 此段偏二奉願

上候也

十月廿六日

右御事件ニ付御 族御会合御集議有之候、 其砌定安様 直応様

も御各自御来邸御相談有之候

十一月七日午後 御 族様御令扶共御集会二而、 時ゟ直応様御退隠御事件ニ 直応様御退隠、 付、 定安様御再勤之儀 御同邸江 一両公及

副館長壬生基修

十一月十日部長局
ら左之通御布達相成候

向可被致候、尤雨天之節者順延相成候条、 別紙活板順路書之通相心得、 来ル十五日皇居内御園之菊花拝観被仰付候条、 但有位之輩ニ而有事故妻女不被召連向者参向不苦候へ共、 々随従不致、妻ノミ参向致候儀ハ不相成儀と可被心得候事 正午十二時三十分無遅々同処江 此段可被心得候事 有位之輩妻同伴

妻女衣体

紋付白下着着用可致事

畳付下駄相用、 草履用意可致事

右之趣各家隠居・嫡子・孫・有位別居之輩、 該家ゟ無漏相伝候様

達示可有之、且 一戸ニ付活版摺壱枚ツヽ廻達候様夫々可被伝候事

十一月十日

拝観之輩平常服着用之事

青山御所表門江名刺差出通行之事 但当日限御門鑑札持参二不及候事

拝観時限正午十二時三十分ゟ午后五時限之事

拝観道筋

屋・洗心亭、 蓮池ヲ左旋シ丸山口御花園ゟ梅林等拝観、 青山表門ヲ入、左リ江五 同処御庭門ヲ出、 ノ門ヲ入リ、 御馬場横切り洋館脇御花園、 御花園及御外庭· 九 ノ御門ヲ出順路退散 萩ノ御茶

X

十一月十三日松平直応様御退隠御願左之御書面御指出ニ付、

御捺

候也

明治十年十一月

御旧臣総代

大橋茂右衛門

印

哥木市太郎祖母

印

安井

泉

印

堀田正倫

印

同

人妻

吉 印 御相続人定安殿御再勤御決定之上、

御退隠之儀ハ異存無御

処、

昨年以来御家政向紛紜之末、不得止御情実も有之、

依

印 計相成候

隠居伺

安江被仰付候様奉願候、 若年二者候得共、 相募、 急速全快之目途難相立候間隠居仕、 別紙容体書之通年来精神之病症之処、 宗族·親族協議之上此段奉伺候也 家督之儀ハ養父定 近来別

明治十年十一月十三日

従五位松平直応

一部華族

正二位松平慶永

第 一部華族 正四位松平確堂

南部信民殿第二部長

右ニ付診断書左之通

松平直応

右 者精神之病二付急速難致根治被存候也

十一月

戸塚文海

前条御退隠御 条二付、 左之面々書面為御指出相成候而可 然と

御協議二而指出候

今般直応殿ゟ御退隠之義御申出 三付、 御相談之趣篤ト勘考之

松平定安殿

十一月廿日左之御願書江御調印相成候

隠居相続願

第二部華族従五位松平直応

明治十年十一月四十二年八ケ月養父隠居従四位松平定安

之目途無之甚奉恐入候間隠居奉願候、 未夕若年ニ者候得共、 別紙容体書之通全快之期も不相見、 家督之儀ハ養父定安江 御奉公

続被仰付度、 宗族 親族連署ヲ以此段奉願候也 第二部華族 第二部華族

明治十年十一月廿日

御廻送之条、

深重辱次第二御座候、

永々当家之宝剣無疑念、

大

正四位松平確堂 正二位松平慶永 三二位松平慶永

宮内卿徳大寺実則殿

十二月六日越前国安波賀春日神社社掌吉田常吉、 然ルニ今般吉田常吉所持之旨正二位様ゟ御承知ニ相成、 来候二付、 太刀一振カヘル九条道孝殿往古ゟ御所持之処、紛失有之所在不分明 則正二位様ゟ常吉御示論之上、 本日御家令武田正規御使者二而、 御家従沢木禄平帰県之際受取 左之御書面御添御渡 先祖より伝来之 御懇請ニ

相成候

享保中ヨリ有事故影ト称御懇請ニ付、 越前国安波賀春日神社神主吉田常吉、 祖先伝来小狐丸太刀壱振 拙者常吉江示談候処、

般廻送候間差出候、 御落手可被下候也

明治十年十二月六日

正二位松平慶永

御印

従 一位九条道孝殿

九条殿ら御答書

述候処、 越前国安波賀春日神社神主吉田常吉、 拙家往昔ヨリ因縁之次第有之、懇望仕居候儀内情御依頼申 格別之御懇篤之御取斗ヲ以、 同氏ニ御示談相成、 先祖伝来小狐丸太刀一振 迅速

慶此事ニ存候、 厚奉謝度御請書如斯御座候也

従一 位九条道孝 御印

明治十年十二月十三日

正二位松平慶永殿

十二月九日先般御旧臣之者西南二於戦死之面々招魂祭、 内海陸軍巡查其外御旧臣参拝有之、 辺良顕・中川祐順・永見裕等参拝、 四位樣副御祭主、正二位樣御祝詞被為在、 十時御邸内御神殿ニ於テ御執行相成候ニ付、 正午十二時より午後四時迄之 神酒・赤飯・煮染等被下之 村田氏寿・青山貞・田 正 一位様御祭主、 本日午前

十二月十日御陪食二付午前十一時御参内被遊候

十二月十三日九条道孝殿ゟ前記小狐丸差上候為御挨拶、 左之通被

下相成候

御肴料金五千疋

金百円

安波賀神主吉田常吉

但シ正二位様御初江御配意被為成候ニ付、 夫々御挨拶有之候

毛受洪・大井弥十郎両人江金千疋ツ、被下ニ相成候

十二月廿三日

都合五円被下候事月給弐円御増

十二月廿六日

御一 族御 統様ゟ

右者族長御執務二付為御謝儀被進之() **

但シ御令扶之者へも御取扱有之候

礼御参内被遊候

一十二月三十日宮内省より左之御書冊御拝領被遊候ニ付、即刻為御※

※書冊ノ記載ナシ